

「山陰地区青少年教育指導者研修会」

～青少年教育施設職員の資質向上を図る～

1 趣 旨

青少年教育施設の職員や教育関係者が集まり、円滑な人間関係づくり、コミュニケーション能力向上に関わる技能・ノウハウ等を学び、その後の施設での業務向上に役立てる。また、施設職員同士の情報交換を行い、つながりを深める。

2 事業の概要

(1) 期 間

令和4年11月21日（月）～11月22日（火）

(2) 会 場

鳥取県立大山青年の家

(3) 主 催

国立三瓶青少年交流の家

(4) 協 力

鳥取県立船上山少年自然の家、鳥取県立大山青年の家、
島根県立青少年の家（サン・レイク）、島根県立少年自然の家

(5) 参加者

24人

(6) 講 師

安藤 和也 氏【山陰海岸ジオパーク海と大地の自然館 総括専門員兼副館長】

(7) 日 程

11/21 (月)	13:00		13:30		14:00		17:00		17:30		19:00		20:15		21:00		22:00	
	受付		オリエンテーション 開会行事		【研修①】 「ジオパークから見た山陰地域の自然の魅力」		休憩		夕食		アクティビティ紹介 各施設近況広告・ 人間関係づくり、		【研修②】 入浴		情報交換会		就寝	
11/22 (火)	6:30		7:40		8:10		8:40		9:00		12:15		12:30		12:45			
	起床 身辺整理		朝食		清掃		退所点検		【研修③】 プログラム体験「デイキャンプ」 アウトドアについて語り尽くそう (昼食含む)		閉会行事		事業検討会		解散			

3 事業の内容

(1) プログラムデザイン及びその企画のポイント

本事業は、山陰地区の青少年教育施設職員や教育関係者を対象として、職員の資質向上や、日常の業務に役立つ内容となるよう企画するものであるが、長引く新型コロナウイルス感染症の状況を踏まえて、今年度も対象は山陰地区の青少年教育施設職員に限定した。

初日の研修①では、「山陰海岸ジオパーク海と大地の自然館」総括専門員兼副館長の安藤和也氏を講師に招いた。安藤氏による「ジオパークから見た山陰地域の自然の魅力」をテーマにした講演と演習を通して、身近な自然に対する見方を深めたいと考えた。

研修②は、令和5年度までの本研修会の共通テーマとして位置付けている「人間関係づくり」のプログラムについての学びを深める場とした。また、研修②をこの時間枠に設定することで、「人間関係づくり」のプログラムについてより知りたいことや意見交換したい事柄が参加者の中で明確になり、情報交換会が、研修会の趣旨に沿った活発な対話の生まれる一層有意義な時間にできるものと期待した。

二日目の研修③は、会場である鳥取県立大山青年の家において、主催事業や日々の研修支援プログラムでの実施を検討している「デイキャンプ」を体験する時間とした。これにより、施設職員自身がまずは体

験者の視点でアウトドアへの理解を一層深め、更に指導者の視点で、より効果的な体験活動にするための意見交換ができるようにしたいと考えた。

(2) 運営（連携）のポイント

研修内容の企画に当たっては、会場施設である鳥取県立大山青年の家が有する強みを最大限生かせるようにしたいと考えた。このため、研修日程の原案作成や講師の打診については、鳥取県立大山青年の家が中心となり行った。これを踏まえて事務局の当所と協議して日程を決定し、当所から正式な講師依頼をした。また、当日の進行の仕方について事前に協議し、会場の大山青年の家と事務局の当所で、どの部分をどちらが進行するのかを明確にしておくことで、当日の運営を円滑に行うことができるようにした。

閉会行事後には来年度以降の本研修会への円滑な事業運営につなげるために、事業検討の時間を設定した。ここでは、研修日程の原案作成や講師の打診などは会場施設が行うことなど、本研修会の運営の仕方について確認するとともに、次回会場の鳥取県立青少年の家（サン・レイク）から、来年度開催候補日を伝達することで、準備の見通しをもてるようにした。

4 参加者へのアンケート結果

(1) アンケートの集計

(%)

	満足	やや満足	やや不満	不満
事業全体	95.0	5.0	0	0
研修内容	95.0	5.0	0	0
運営面	80.0	20.0	0	0

(2) 参加者の声

①研修を通じた学びに関するもの

- ・ジオパークの話は、施設職員として考えが広がる内容だった。まずは、身近にある資源、教材を大切にしたいと感じた。
- ・幼少の頃から当たり前にある景色や食べ物も見方を変えることで、なぜそこに生まれたのか、広がったのかを考えさせられるきっかけとなった。ファシリテーターとして生かせるヒントをいただいた。
- ・実際に、キャンプ飯を作ることで、利用者の楽しみ方や困り感を実感できた。

②参加者交流に関するもの

- ・コロナ禍ではあるが、5つの青少年教育施設指導系職員が集って、スキルアップや意見交換を行える本事業の価値はとても高い。
- ・デイキャンプに取り組むことで、自然と各職員さんと会話が生まれた。
- ・交流はやはり大事ですね。みなさんに元気をいただきました。

③来年度以降の要望など

- ・一般、教職員にも声を掛けてもおもしろいと思った。
- ・職員、施設によって、体験レベルは様々なため、基本+αくらいの技術や技能の向上が図られる内容があるとうれしい。
- ・その施設の強みを生かして、体験活動をしたり、どなたかのお話を聞いたりできればよいと思う。
- ・例えばこの研修会でフィードバックしたことを報告し合う（文章でも）のもよいかもしれない。

5 成果と課題

《成果》

- ・参加者が各施設での取組から良い刺激を受けたり、職員交流することの楽しさを感じたりするなど、参加者は「集い、学ぶ」という社会教育の醍醐味を職員自らが味わうことができた様子であった。このことから、本研修会の有意義さを再認識することができた。
- ・研修①では、参加者の声にあるように、身近にある資源や教材を大切にしようとする意識や、日々の研修支援や事業運営に生かしていきたいという意欲の高まりが感じられるなど、身近な自然に対する見方を深めるというねらいを達成できた。
- ・研修③では、実際にデイキャンプ体験をする中で、参加者は活動自体の楽しみ、活動中に感じる困りに気づくことができた。また、各施設でのアウトドアクッキングの実施の様子や、手作りのキャンプ道具についての活発な意見交換をする姿が各班で見られた。これらのことから、指導者視点と利用者視点の両面から活動プログラムを見ることができたといえる。

《課題》

- ・令和5年度までの本研修会の大きなテーマとしている、「円滑な人間関係づくり」や「コミュニケーション能力の向上」に関して、研修②は参加者の印象に残りにくかった様子がある。
- ・また、「この研修会でフィードバックしたことを報告し合う場があるとよいのではないか」という参加

者の声にもあるように、人間関係づくり、コミュニケーション能力の向上を大きな研修テーマとするのが令和5年度で一区切りとなるため、締めくくりを意識して、各施設での取組の成果を持ち寄り意見交換するなど、まとめの活動を計画したい。

- 新型コロナウイルス感染症の感染拡大の状況にあり、施設職員のみを対象を絞って実施してきた本研修会であるが、感染拡大の収束後を見据えた準備が必要な時期になってきた。これを機に、研修会の開催の目的（「各施設職員の技能やノウハウの獲得」なのか、「広く青少年教育関係者にとって有意義な新しい知見の獲得」なのか）を見直したい。また、対象を従来どおり広く教育関係者にも広げる場合の広報や連携の仕方について検討したい。



研修①：施設ごとに演習に取り組む様子



研修①：講師の安藤氏による演習の講評の様子



②：各施設のアクティビティ紹介の様子



研修②：各施設のアクティビティ紹介の様子



研修③：デイキャンプ体験の様子



研修③：デイキャンプ体験の様子



研修③：デイキャンプ体験の様子



研修③：デイキャンプ体験の様子

(担当：企画指導専門職 向原 将平)